

三年保育児の成長観察

東京・神田寺幼稚園

井桁佐以子
井山不二子
渡辺郁子

当園では、新しい教育計画をたてる為の一つの資料として、幼児の成長過程を三年保育児三十三名を対象として、過去三年間、個人別に観察した結果を身体発育面及び普段の身体的活動状態の二面から調査した。

第一表 組平均と全国平均との比較

年令		身長 (cm)		体重 (kg)	
		男	女	男	女
3才	全国組	96.3	95.0	14.9	14.5
		99.5	99.0	15.2	15.6
4才	全国組	101.4	100.4	16.2	15.6
		107.0	106.0	16.4	17.6
5才	全国組	106.2	105.1	17.4	16.9
		109.9	109.5	18.3	18.6

全国組平均 (31年度)

組平均 31. 32. 33. 年度の6月測定結果

第二表 満二か年の生長

性別	身長 (cm)		体重 (kg)	
	男	女	男	女
組平均	10.5	10.5	3.1	3.0

第三表 ビルケ修正指数による組の平均

年令	男	女
3才	106	108
4才	103	104
5才	103	104

I 資料

三年間の身体測定結果、健康診断結果、体力測定結果、個人別行動記録及び保育日誌、出欠席状態、家庭環境調査、健康調査、興味検査、社会的生活能力検査、智能検査。

II 個人別研究 (発育状態と活動性)

(1) まず身体発育における個人差を組平均との比較においてみる。

(2) 次に活動状態の三か年の変化を個人別に調査する。そして活動性を活動能力と活動的遊びに対する参加度とに区分し、それぞれ上中下三段階に評価し、それによって三年間通じての活動性の発達傾向をとらえた。

III 活動性の発達傾向

三十三名のものを比べてみた結果、AからNまで、14型に類型別された。それを大きく三群にわけると平均上群、平均の群、平均下の群であり、次頁に示すものは、類型別説明の一例である。

IV 三群の比較 (図表略)

体力測定結果及び身体発育とも、活動性(上)群は(下)群に比し、よい結果を示していた。

V むすび

三年間の集団生活をなし得たこれら健康な幼児(名をのぞいて)においてさえ、これだけの成長発達における個人差と問題がみられ、幼児の普段の活動性が、身体発育や、健康状態、家庭環境及び社会性の有無に密接に関連することがみられた。

第四表 実度の分布表 (5才)

P	人数
110	1人
107~109	2人
104~106	11人
101~103	14人
98~100	5人

(1) 活動性平均(上)の群
(注) ①活動能力
②活動的遊びに対する参加度

A		B	
①上	3才	①下	3才
②上	4才	②下	4才
③上	5才	③上	5才
3名		2名	

このAの型三名は、活動能力、参加度とも三年平均上で組で最も活発活動的な子どもたちである。

四才まで不活発で三年目五才組になり、急に活動性上に変った子どもたちで社会性がなかつたためにその遊びも停観的であつたが、社会性が出てくるにつれ、活動性を発揮するようになった。

(2) 活動性平均(下)の群

J		N	
①下	3才	①下	3才
②下	4才	②下	4才
③下	5才	③下	5才
2名		1名	

活動能力、参加度とも三か年平均下であつた。原因をみると、一名は軽度の心臓障害、他の一名は三才の時に肋膜炎をし、発育がおくれているうえに、家庭的にも問題があり不規則な生活が続いていることが原因としてあげられる。

運動に対し熱心でよく参加するが、平均台、その他の運動遊具を使うことが下手で特に運動的運動が不得手であるその他の説明略。先天的に運動神経がよいのではないかと考えてみた。

ヴァインランド社会的成熟 尺度個人診断分析表の作成

呉・仁風園 佐藤 由子

K式改訂 Vineland Social Maturity Scale は最初アメリカの Doll が考案したもので、これを、広島女子大で改訂標準化した。

この使用範囲は二才六才児で、項目は Vineland のものがそのまま踏襲されている。ただし、改訂に際して△一二と三段階の細い具体的基礎内容が、各項目ごとに設けられ、評定が精密で客観的に出来信頼度が高められるように工夫されている。これを保育上に役立てる為に、幼児の発達過程において、個性化より社会化への段階を考慮して七方面から検討し、知能のような比較的単純な内容でなく、社会性の各分野に関する、殊に幼児の理解と指導ということを指導目標とし、幼児の成熟度とその方向を知ろうとして、五、六才児の個人診断基準を作成した。現行の改訂版はアメリカの問題配列のままになっているので、私たちが幼児に実施してみるとこの配列ではわが国の幼児には年令区分が不自然で不適當と思われる項目もある。Q₁を調査してみると、いろいろ成熟未成熟な点が判明する。この調査は知能と切り離せない関係にあり、向性検査と比較してみることにも合せて考えられる。

こうして調査した結果から、指導法すなわち猿の方面特に本人の弱い領域(例えば衣自律性、表現能力など)を助成してやるようにもつていかななくてはいけない。家庭環境からくるもの、本人の健康状態からくるもの、両親の子どもに対する態度、本人の素質、経済状態といろいろな角度から原因を追究しかつ解決してゆかねばならない。私達は Vineland を試みることによつて、幼児が内容的に円満なる成長発達をとげるよう、個々の子どもをよく理解する一つの具体的方法として、この尺度の検討をおこなつた次第です。